

理解度&釣れる度100%



マルキュー

優良 餌本



KEEP YOUR
GOOD FISHING



優釣を約束する餌本です

へらエサ パワーブック



Contents

- 02 現代のセット釣りにマッチした「サナキパワー」
- 06 浅ダナウドンセット釣り
- 10 チョーテンウドンセット釣り
- 14 段差の底釣り
- 18 バランスの底釣り
- 19 グルテンセットの沖田

2018
冬 春号

HERA BAIT POWER BOOK

現代のセット釣りにマッチした 「サナギパワー」

さなぎ粉の集魚力と最強のバラケ性

2017年9月に発売となった『サナギパワー』。本格的なセット釣りのシーズンを迎え、出番が多くなってきたことでしょう。すでにこのエサを使っている方も多いとは思いますが、改めて、このエサの特長、使い方のコツなどを紹介しましょう。

まず、『サナギパワー』という名前どおり、エサの成分となるさなぎ粉が大量に配合されています。近年では、ペレット系のエサが注目されてきましたが、実はさなぎ粉のほうが集魚効果は上なのです。この集魚力の高いさなぎ粉が大量に配合されている『サナギパワー』は、へら鮎を寄せるという点では最高レベルのエサなのです。

しかも、大きさの違うさなぎ粉を配合することで、エサの開き方、粒子の落下にも変化がつくことで、アピール力も優れています。いまセッ

ト釣りでかならずと言っていいほど配合する『粒戦』とのマッチングにもよく、最速で落下する『粒戦』、そのあとから『サナギパワー』の大小の粒子という具合になります。

バラケ性は最強に設定されています。これは、最近のセット釣り、とくにウドンセット（浅タナ、チヨーチン問わず）において、開くエサが必要という条件を踏まえています。しかし、開くエサというのは、エサ付けがしにくいだけに、それだけエサのコントロールが難しいものです。ところが、この『サナギパワー』はバラケ性最強でありながら、実際に作ってみると、想像以上にまとめやすいエサとなっています。ですから、開くエサなのに持たせ加減のコントロールもしやすい。つまり、現代のセット釣りのバラケエサの軸と

大量のさなぎ粉を配合してあるので集魚力が高い。粒子の大きさが違うようにしてあり、バラケのアピールもある。





バラケ性 = 最強 重さ = 重

なる要素を詰め込んだエサ
なのです。

使い方のコツとしては、非
常に開くエサの特長を生かか
しつつ、まとめる要素のあ
るエサとブレンドするのが
ポイント。なかでも圧加減
で持たせ具合のコントロール
が容易な『セットアップ』
がベストマッチします。さら
に、手水などの調整をしても
ベタツとしない!!バラケ性
を損なわないので、水中での

バラケ性は手触り以上に効
果が生きています。

また、このエサは管理釣り
場のセット釣りだけでなく、
さなぎ粉の集魚力をいかし
て、野釣りのセット釣りに
も使えるので、セット釣り全
般に幅広く使えます。魚を寄
せる効果、バラケ性の高さ、ま
た重さもあるのでタナへの
集魚にも優れていますから、
管理釣り場、野釣り場問わず
に使えるのです。

●野釣り場向けバラケエサ

『サナギパワー』 200 cc

『新 B』 400 cc

『段差バラケ』 400 cc

水 200 cc



現代のセット釣りにマッチした 「サナギパワー」

強力な縦バラケでタナに呼び込む！

バラケ性最強を謳う『サナギパワー』ですが、そのバラケ方は強力な縦方向。横への拡がりを極力抑えたバラケ方なので、余計なウワズリを防ぎ、タナにへら鮒を呼び込み、そこにあるくわせエサにアタらせることが可能です。重さもあり、大小の粒子が時間差で落下しますので、アピール力も高く、また、へら鮒の活性に対しても幅広い対応ができます。積極的にエサを追う状態であれば、重さのある落下の早いものに反応し、活性が落ちてもあとから落下する小さい粒子がへら鮒を呼び込むわけです。

また、この重さがあって縦方向へのバラケは、ねらうタナが深くなる野釣りやチョーチン釣りでも確実にタナまでエサを届けることができます。たとえ、途中でエサがバラケ過ぎてしまっても、ハリから抜けてしまっても、そのエサは確実にタナまで落下していきます。この特長を考えれば、上層で抜いてしまいういゆる、抜きセツト。でも、その効果は有効になります。バラケエサへの反応が極端に悪くなる厳寒期や混雑時など、バラケを抜くことでアタリをだす、抜きセツト。ですが、ただバラケを抜けば釣れるのではあ

りません。抜けたバラケがねらいのタナへ届くからこそアタリにつながるわけで、『サナギパワー』の重さと縦バラケは、確実にタナまでエサを届けてくれることから、大きなメリットとなるのです。また、いくら重いとはいえ、ペレット系よりは軽いですから、魚の活性に対応できる幅も広くなるわけです。

さらにペレット系のエサとの大きな違いは、粘りがでにくいこと。これはどのエサにもいえませんが、手直しなどエサをいじればどうしても粘りができます。この粘り加減を利用してエサを持たせたりしますが、これが限度をこえると、開きが極端に弱いエサになってしまいます。多くの方にも経験があるかと思いますが、いい感じで釣れていたのに、気づくと

強力な縦バラケでねらいのタナまでエサが確実に届く。



手水などでエサの手直しをしても、水中でのバラケ性を維持してくれる。

アタリが激減。こんなときは、それまで釣れていたエサの開きが弱くなってしまいい、へら鮒の反応が悪くなってしまうと考えられます。しかし、さなぎ粉が多い『サナギパワー』は、そのエサの開きの大敵である粘りがでにくいエサ。それこそ、多少練ったとしても、水中では充分な開きをキープするので、へら鮒の反応が悪くなることも少ないのです。

●管理釣り場向けバラケエサ（低活性時）

『粒戦』 50 cc+

『とろスイミー』 50 cc+

水 150 cc+

『サナギパワー』 150 cc+

『セットアップ』 150 cc



●管理釣り場向けバラケエサ（高活性時）

『粒戦』 100 cc+

『とろスイミー』 50 cc+

水 200 cc+

『サナギパワー』 200 cc+

『セットアップ』 200 cc



浅ダナウドンセット釣り

現代ウドンセットのアプローチは 「ちょい持たせ系」

浅ダナセット釣りの基本は、バラケをタナまで持たせて（ウキをしっかりとナジませて）、タナでバラけた粒子に寄ってきたへら鮒にくわせエサを食わせるものです。しかし近年、この釣り方が主流となることで、多くの釣り人に攻められたことから、単純にバラケをナジませるだけでは、なかなかよい釣果に恵まれなくなってきました。おそらく、へら鮒がこういう釣り方に対して慣れてしまっているからです。

そこで、色々な釣り方が研究されていますが、それはその人だけがでできるマニアックなものになっていきます。そんなマニアックな釣りは、トーナメントなどの究極の場面でこそ際立ちますが、かなりの高等テクニクであり、そう容易にマネすることはできません。

しかし、そういったトップレベルの釣りに共通しているのは、いかにへら鮒に反応をださせるかということ。つまり、どういう釣り方のアプローチをしても、へら鮒が反応しなければ釣果には結び付きません。

では、どうやってへら鮒に反応させるのかといえは、開くエサを上手く使いこなすことです。開くエサとはバラケエサのことです。そんなの当たり前のことと思われるかもしれませんが、この「開く」というのがポイントなのは事実です。

もともとバラケエサは開くようになっていますが、これを必要以上にいじったり、エサを持たせるようにギョウギユツとエサ付けしたりしまいがち。ここに落とし穴があります。このように必要以上にいじったエサは、水中で極端にバラケ性を失っています。これでは、へら鮒が興味を示さないエサになってしまい、アタリがないどころか、サワリすら少なくなってしまうものです。

ここで反応が少ないからといって、どんどんエサを打つ、大きな開くエサを打つという手もありますが、これでは、ただむやみにへら鮒を寄せる、騒がせることにもなりません。

ここで基本であるタナに寄せるということが重要になってきます。しっかりとナジませてという基本は、タナにへら鮒を寄せるという意味で、ウキをナジませること。タナにエサを届けること。この届けるエサが、へら鮒が反応しやすい開くエサであればベストなのです。

しかし、これは言葉でいうほど簡単ではありません。

エサをナジませるには、開きの少ないしっかりとエサのほうが付けやすいもの。開くエサ、つまりまとまりにくいエサをタナまで持たせるのは、意外とむずかしいことです。開くエサをタナまで持たせるというのは、ちょっと矛盾した構図ですが、それゆえにキモであるのです。

ウキの動きでいえば、エサの重さでスーッとナジむのではなく、少しゆっくりナジむイメージです。これは、エサが開いている（膨らんでいる）ことから、ダイレクトにその重さがウキにかかってないことから、こういう動きになるのです。

ちょっとむずかしく聞こえるかもしれませんが、次のような方法で自分に合うものを試してみてください。

①チモトをだけを抑えたらフ付け

②チモトをギュッと押さえないエサ付け

③エサを軟らかくして水分の多いタッチにする

エサ付けは人それぞれですし、使っているエサによっても、変わってしまいます。ですから、どんな方法が正解というわけではありません。自分の付けやすい方法、手に合う方法で、開くエサをナジませることを身に付けるとよいでしょう。

そして、このアプローチを表現するとき、ちよい持たせ、という言葉を使うことが多いようです。しっかりと持たせるのでなく、ちよつと持たせるイメージから生まれた言葉です。ギリギリ持たせるという表現をすることもありますが、うまくいかないと持たないこともあります。それでは、肝心のタナへのエサ量が足りなくなります。絶対に持たせろとは言いませんが、やはりある程度ナジませることは意識したほうが、失敗は少ないでしょう。

●浅ダナウドンセット釣り・ちよい持たせ系

『粒戦』 100 cc+

『とろスイミー』 50 cc+

水 150 cc+

『サナギパワー』 150 cc+

『パウダーベイトスーパーセット』 150 cc



実寸大



浅ダナウドンセット釣り

ナジませて釣れないときは抜き系の出番！ アタリがでるタイミングを意識しよう

前頁で触れたように、バラケをタナまで持たせて（ウキをしっかりとナジませて）釣

るのがセット釣りの基本です。しかし、厳寒期の超低活性時や混雑した状況では、なかなかひと筋縄では釣れない状況もあります。このような状況では、バラケエサの持たせ方に工夫を凝らす必要があります。

バラケエサをタナまで持たせるアブローチでは、どうしてもへら鮒を呼び込めないときに効果的なのが、バラケをタナより上層で抜いてしまう抜きセットです（タナまで持たせてすぐ抜く、タナ抜きき」という方法もある）。テンポよくバラけた粒子が降ってくることで、へら鮒はゆっくりとですが、落下した粒子に反応するようになります。そして、その粒子を吸っているところへくわせ

エサが落下してくればアタリにつながるという図式です。

これは活性が落ちたために、バラケエサから遠い位置にしかへら鮒が寄ってこないことから成立する釣りです。バラケエサに近づかないへら鮒を釣るには、まずはハリスを長くするというのが、基本的な考え方です。バラケエサからの距離を長く取った位置にくわせエサをおくということと同じ原理を、上層でバラケエサを抜くことで作っているのです。

この抜きセットのメリットは、比較的短いハリスで釣れることです。釣れないからといってハリスを伸ばすにも限度があります。ハリスが長ければ、その分ハリスにへら鮒が触れることで余計な動きもでてしまいま

くなるので、拾い釣りになっ

てしまいます。それをバラケエサを早く抜くことで、バラケエサから遠くなった状態、つまり、粒子が漂っている状態を作ること、早いタイミングでアタらせることができるのです。

へら鮒は落下してくるエサに反応しやすいのは周知の事実です。つまり、落下してくるエサが動いているエサとなります。ですから、活性が落ちたときほど、くわせエサがぶら下がった状態に止まっているエサには反応が悪くなるのです。

そこでくわせエサが動いているとき、つまり落下中にアタらせるのが理想的です。くわせエサの落下中とは、ウキが立ってからナジミ切るまで。この間でアタリをだすようにするわけです。とりわ

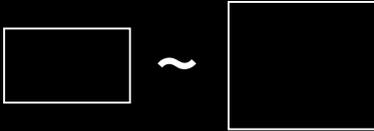
けこの落下中のなかで一番ヒット率が高いのが、ナジミ切る寸前なし、ナジミ切った直後です。言葉を変えれば、くわせエサが張り切る寸前から張り切った（ぶら下がった）直後になります。

ですから、くわせエサが付いた状態のエサ落ち目盛りを確認しておくこと、そしてこのタイミングでアタリが

でるという意識が必要で、ハリスが張り切る前であれば、アタリは小さいものになることもあります。もしかしてアタリかな？程度

●オモリ 実寸大

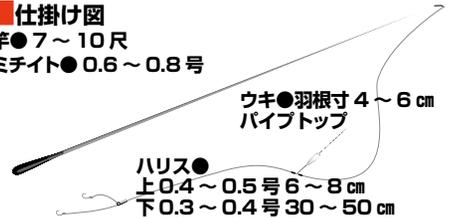
0.25mm厚板オモリ 10mm × 17mm ~ 17mm × 20mm



■仕掛け図

竿● 7 ~ 10 尺

ミチイト● 0.6 ~ 0.8 号



ウキ●羽根寸 4 ~ 6 cm
パイプトップ

ハリス●

上 0.4 ~ 0.5 号 6 ~ 8 cm

下 0.3 ~ 0.4 号 30 ~ 50 cm

ハリ●上 5 ~ 7 号、下 2 ~ 4 号

●浅ダナウドンセット釣り・抜き系

『粒戦』 100 cc+

『とろスイミー』 50 cc+

『セットガン』 100 cc+

水 200 cc+

『サナギパワー』 100 cc+

『セット専用バラケ』 100 cc+

『軽麩』 100 cc

実寸大



チョーチンウドンセット釣り

いったんナジませてからの縦誘いが 現代のスタンダード

チョーチン釣りの強みは、ねらいのタナにへら鮒を凝縮でき、それにより安定した釣果が得られることです。浅ダナの釣りにくく、エサ打ち点も一定にできることから、よりそれは顕著になります。

近年の釣り方の主流は、縦誘いを駆使した釣り方になっています。浅ダナの釣り同様、バラケエサをしつかりナジませて待つているだけではなかなか釣れないのが現状です。そこで、竿を持ち上げてウキを上下させる縦誘いをして、バラケエサを拡散させたりしてアピールしたり、それと同時にくわせエサも動くので、バラけた粒子と同調したり、くわせエサの落下を何度も演出させ、アタリをだすというものです。そしてこの縦誘いも、回数や入れるタイミング、その

強弱など、あらゆるバリエーションを駆使して釣っていくこととなります。基本的には活性があるときは、数回いでアタリがでますが、渋くなればその回数が増えることもあります。強弱・大小を組み合わせ、アピールなら強め・大きめ、くわせるための誘いなら弱め・小さめとなります。また、ゆっくり大きく、小さく早くなど様々なバリエーションを駆使してみるとその日に反応しやすいパターンが見えてきますので、それを見つけることも重要です。ですが、いずれもバラケを持たせてタナを作って釣ることには変わりありません。そこで求められるバラケエサは、アピール力のあるボツタッチで、何度か誘ってもすぐにハリから抜けることのない硬さも必要です。

チョーチンウドンセット釣りは、縦誘いを駆使して釣っていく。



釣り方のコツは、このようにイメージのバラケエサをやや大きめに付け、ウキのトップが沈没するぐらいしつかりと深ナジませ、そこから縦誘いを繰り返します。このとき、ただやみくもに竿を動かすのではなく、誘ったあとにナジミ方に注視します。

まず、エサがまだしっかり付いているときは、スーッと早い動きでナジみます。これが何度か誘うとバラケエサが広がることで、そのス

ピードが遅くなります。このときに、ナジんでいくトップにサワリやアタリがでる可能性があります。そして、このときのアタリは、ハリスが張り切っていない落下中のこともあるので、小さいものやちよっとした変化みtainなこともあるので、まずはそれもあわせていきましよう。魚の寄りが多くなれば、次第に強いアタリも増えるようになります。

そして、バラケが完全に抜けてしまっから1回縦

誘いを入れて、変化がなければ、打ち返しというリズムになります。くわせエサだけの状態で誘ってアタるようになれば、タナができている証拠です。

くわせエサはバラけた粒子と同調させますので、小さめになる傾向です。近年では『感嘆』を使うことが多く、『さなぎ粉』を混ぜた通称『さな感』が多用されています。エサの粒子色のカモフラージュになるので好まれています。また、それにあわせて、下ハリスは長め、下バリは小さめという傾向になっています。厳寒期になると、この釣り方ではへら鮒の寄りが悪いときがあります。これはへら鮒が、ある程度居心地のよい水温の層から動かなくなるからです。そういう場合は、こちらから竿の長さで魚にアジャストしていくこと。8尺、9尺という短竿ではなく、12〜15尺という中尺がメインとなってくるでしょう。

● チョーチンウドンセット釣り・持たせ系

- 『粒戦』 100 cc+
- 『とろスイミー』 50 cc+
- 水 200 cc+
- 『サナギパワー』 200 cc+
- 『段底』 200 cc

実寸大



● くわせエサ

『感嘆』1袋に『さなぎ粉』20〜30 ccを入れた“さな感”が最近の主流。粉と水は1対1で作る。



チョーチンウドンセット釣り

厳寒期は抜き系のアプローチ。 軟らかいエサで抜く位置をコントロール！

タナまでしっかりナジませてからの縦誘いをいくら繰り返しても、いつこうにウキが動かないときは、エサを追ってへら鮒がタナに集まってこないと考えられます。こんなときは、抜き系のアプローチが必要になります。

以前は、チョーチン釣りで抜きはないなどと言われてきましたが、最近では、かなり市民権を得た釣り方になってきました。

抜き系のアプローチの考え方は、浅タナと同様です。バラケエサに近づかないへら鮒にくわせエサを食わせるにはハリスを長くするのがセオリーですが、それをタナより上層でバラケエサをハリから抜くことで、それと同じようなことを水中で演出するのです。

ただし、浅タナと違ってチョーチンは、タナまでの距

離が長くなります。竿が長くなればなおさらです。その長い距離の中で、バラケエサを抜く位置を思いどおりにコントロールするというのは至難のワザです。ですから、この部分は割り切って考える必要があります。

まずは、タナ近辺まである程度バラケエサを届けていくことです。ある程度とは分かりにくいですが、1〜2目盛り程度はバラケエサのナジミ幅がでるくらい。つまり、抜きとは言ってもいきなり抜いてしまうのではなく、タナ近くでという意識です。まずはこのアプローチではじめ、サワリやアタリがでるハリスの長さを見つけてみましょう。また、このときエサが持ちすぎってしまった場合は、竿を強く叩くように動かして、強制的にバラケを抜いてしまうのもあります。

バラケエサの傾向としては、活性が低く食い気がなくなるほど、軽く細かな粒子の素材の割合を増してゆつくりバラケを沈下させ、動きの鈍いへら鮒でも反応できるようにします。

このアプローチでへら鮒を反応させることができないときは、バラケエサを抜く位置を上層に修正します。これこそねらいどおりにコントロールするのは難しいので、徐々にエサのタッチを軟らかくし、ハリから抜けやすいエサに手直していくといいかもしれません。そして、抜く位置が高く、水面に近く、なればなるほどハリスは短くしていきます。お分かりだと思いますが、バラケからの距離が遠くなった分、ハリスを短くして釣ることができません。

この上層から抜くアプ

ローチですが、タナまでエサが届かなければ成立しません。ですから、「粒戦」など、確実に下方向へ落ちてくるエサが重要で、アタリがでにくいときなどは、使っているエサに別作りの「粒戦」を足すことが有効です。また、流れがあるときなどはその威力を発揮できない場合もあるので、使い所を間違わないようにしましょう。

このアプローチでも、誘いのテクニクを使います。バラケが抜けてくわせエサがナジミきつたところから、小さな縦誘いを駆使してアタリを引きだします。そのため、エサ落ち目盛りは沈め気味にするのがセオリーで、くわせエサだけ付いた状態でトップ先端1目盛りから3目盛りの間にするのがスタンダードです。また、縦誘いをしたあとのナジミ途中の動きを表現してくれるセミロングタイプのムクトップウキを使うことをオススメします。

■仕掛け図

竿●8～15尺

ミチイト●0.6～0.8号

ウキ●羽根寸6～13cm

PCムクトップ

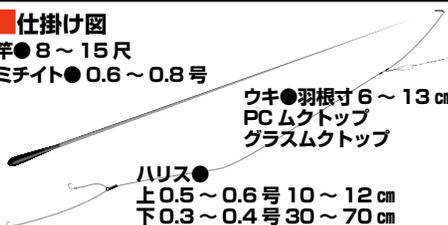
グラスムクトップ

ハリス●

上0.5～0.6号 10～12cm

下0.3～0.4号 30～70cm

ハリ●上6～9号、下2～4号



■オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ 17mm×20mm～17mm×40mm



●チョーチンウドンセット釣り・抜き系

『粒戦』 100cc+

『粒戦細粒』 50cc+

『セットアップ』 100cc+

水 200cc+

『セット専用バラケ』 200cc+

『BBフラッシュ』 150cc

実寸大



落下中の開きを抑えてタナまでナジませる！

厳寒期の定番とも言える段差の底釣りは、底近くにいるへら鮎を底に着けたくわせエサに誘導してアタラせる釣り方です。ですから、バラケエサをタナまで確実に届けることが必須条件になります。基本はしっかりとナジませてから、ジワジワとバラケエサが抜け、それによってへら鮎を底へ誘導する。そして、バラケが抜けてから、つまりくわせエサだけの状態になってからのアタリをねらっていくべきです。

段差の底釣りは底から離れた位置にバラケエサがくるので、エサが底だけに集中するバランスの底釣りとは違って広範囲のへら鮎を寄せることができません。さらに、バランスの底釣りではターゲットにしにくい宙層のへら鮎にもバラケエサの存在をアピールすることができメリットもあります。

ただ、たとえ宙層の魚でも、底へ呼び込むことが本来のねらいですから、むやみに早いタイミングのアタリに手をだしていくのは得策とはいえません。もちろん、バラケエサが付いている状態でアタリがでて、それがヒットすることもありますが、そのアタリはバラケエサへのアタリかもしれませんし、イトズレかもしれません。まだ、バラケエサが付いている状態であわせてしまえば、そのバラケエサが舞い上がることでウワズリを招きかねません。厳寒期のウワズリを修正するのは、かなり時間がかかりますので、手堅く釣るほうがよいでしょう。

ですから、基本はくわせエサだけの状態からのアタリを待ちます。釣り始めにくわせエサだけの状態でのエサ落ち目盛りを確認しておけば、バラケエサが抜けたこ

とは誰でも容易に判断できません。ここからのアタリであれば、かなりの確率でくわせエサへのアタリと言えますので、この釣りのメリットでもあるヒット率の高い釣りを展開できます。

この釣りではアタリをだせるかどうかは、バラケエサの広がりのコントロールにかかっています。バラケエサが広がりがすぎれば、遠巻きになったり、ウワズリを招いて、肝心のくわせエサまでへら鮎を導けません。すると、サワリはでもアタリがでない状態になります。

逆に、広がりが少ないとアピール不足になりへら鮎の寄りが少なくなります。こうなると、サワリすらでないことにもなります。理想を言えば、バラケエサがナジミ切るまでの動きは少ないものの、ナジミ切ってからサワリが出始め、そこから徐々にトッ

プが返し、バラケが抜けて間もなくアタリがでる。このようなウキの動きを目指しましょう。

バラケエサは、しっかりと系のボソツッチが基本で、タナまで持つしっかりと、まとまりのあるものになります。ポイントではエサ付けで、落下中の開きを抑えるため表面は丁寧に転がします。ただ、タナに入ってから膨らんで表面からポロポロとこぼれるようにバラけさせるために、エアを含んだ状態にしておくことです。

抜き系のアプローチ

バラケエサをしつかりナジませて、底へバラけた粒子をジワジワと降らせる釣り方では、イトズレなどの無駄な動きが増えたり、明らかにバラケエサへの反応が強すぎる場合など、釣りにくい状

●段差の底釣り・持たせ系

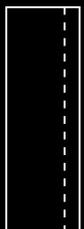
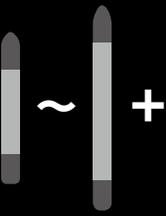
『粒戦』 100 cc+
 『とろスイミー』 50 cc+
 水 200 cc+
 『サナギパワー』 200 cc+
 『段底』 400 cc+
 『カルネバ』 100 cc

実寸大



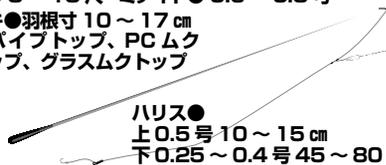
●オモリ 実寸大

「絡み止めスイッチシ
 ンカー」0.8g + 0.25
 mm厚板オモリ 8mm ×
 30mm ~ 「絡み止めス
 イッチシンカー」1.2g
 + 0.25mm厚板オモリ
 10mm × 30mm



■仕掛け図

竿● 8 ~ 18尺 ミチイト● 0.6 ~ 0.8号
 ウキ● 羽根寸 10 ~ 17cm
 細パイフトップ、PCムク
 トップ、グラスムクトップ



ハリス●
 上 0.5号 10 ~ 15cm
 下 0.25 ~ 0.4号 45 ~ 80cm

ハリ● 上 6 ~ 7号、下 2 ~ 4号

タナまでナジませてからの抜き方を探る！

況が起きた場合、ナジませたバラケエサを塊で抜いてしまいう抜き系のアプローチも有効ですので、覚えておきましょう。

バラケエサを塊で抜くことから、底へバラケエサを速く届けられることができ、水中のバラケエサの漂いも少ないので、余計な動きも減らせます。これで、より早いタイミングで釣れることがあります。また、超食い漁りのときなど、エサに反応した数少ない魚を確実にヒットさせる場合にも有効です。

注意したいのは、バラケエサを抜くことを意識するあまり、早く抜けすぎてしまうことです。ですから、抜き糸とはいえ、いったんナジませてから抜くという意識が大切です。理想は、2〜3目盛りの浅いナジミからひと呼吸おいてスパッと抜けるものですが、これが難しい

場合は、5目盛りほど深ナジミさせてから抜けるようにします。たとえ、ナジんですぐ抜けるのであっても、1回ナジんでというのがポイントですので、ここだけは注意しましょう。

このようにナジんですぐ抜けるを演出するには、バラケエサのタッチと付け方がポイントになります。タッチは、水分を多く含んだ軟らかいもので、エサ付けはバラケが抜けやすいようにエサの上からハリを刺す方法がおすすめです。そして、落下中にエサが抜けないように、きれいに丸くエサ付けします。このようにすると、タナに届いたときは、バラケエサの水分量がかかり飽和状態になるので、ハリからすぽっと抜けるようになります。どの程度のタッチで抜けるかは、バラケエサに手水を少しずく加えて探ってください。

水深なども関係しますので、いきなり抜こうとせず、少しずつ探っていけば失敗も少なくなるでしょう。ブレンドに必要な要素は、重さとまとまり。これをタッチで調整というのが、ポイントです。

抜き系の釣りもバラケが抜けてからは、バラケエサを持たせる釣り方と同様です。くわせエサだけが付いたエサ落ち目盛りよりひとつ下の目盛りが水面にできればチャンスです。これはアタリがでる前触れであり、段差の底釣りにおいては、勝負目盛りなどと呼んでいます。この目盛りがでないときは、底が掘れた、くわせエサが深いところに落ちた、何か引つかかったなどが考えられます。こういう場合には、竿を持ち上げてくわせエサを置き直してみましよう。置き直すことでアタリがでることも多々あります。また、

置き直して勝負目盛りがでない場合は、底を測り直してタナを確認してみることです。

段差の底釣りで使うくわせエサは、確実に底に着底するようにするので、重さのあるウドン（タピオカ系、わらび系が最適です。また、くわせエサだけの状態でアタリを待ちますから、くわせエサが軽すぎると、ハリスが弛みすぎてしまうなどの理由で、明確なアタリがでないこともあるからです。ただ、底が軟らかい場所などでは、その重いくわせエサが潜ってしまつこともあるので、『力玉』など、多種のくわせエサを用意しておくことも忘れずに。

最後に釣りやすさを考えると、戻しの動きがきちんとできるウキを使うことを推奨します。バラケエサが抜ける、抜くことに対して、それをレ

●段差の底釣り・抜き系

『段底』 400 cc+

『粒戦細粒』 100 cc+

『ダンゴの底釣り夏』 100 cc+

水 250 cc+

『BB フラッシュ』 200 cc

実寸大



●くわせエサ／『魚信』1袋＋『特選わらび彩』20 cc＋水 85 cc

●作り方 (600W のレンジを使用)

- ①マグカップに上記のエサと水を入れて混ぜる。
- ②50秒温めかき混ぜる
- ③20秒温めしっかり混ぜる
- ④30秒温めかき混ぜる
- ⑤20秒温めかき混ぜるを3回繰り返す
- ⑥冷水に絞り出し10分おく
- ⑦適度な長さに切り、タッパに入れてから『わらび職人』を適量絡める。



スポンスよく表現してくれるウキ、確実に戻しの動きがでるウキを使いましょう。

バランスの底釣り

●両ダンゴ

『ペレ底』 100 cc+

『ダンゴの底釣り冬』 100 cc+

『グルバラ』 100 cc+

水 150 cc



実寸大



●グルダンゴ

『わたグル』 50 cc+

『グルテン四季』 50 cc+

『ダンゴの底釣り夏』 50 cc+

水 150 cc



実寸大



グルテンセットの沖宙釣り

●バラケエサ

『ペレ道』 100 cc+
 『バラケマツハ』 200 cc+
 『セットアップ』 200 cc+
 水 150 cc

実寸大



●くわせエサ

『グルテン四季』 50 cc+
 水 50 cc

実寸大



●グルテンセットの沖宙オモリ量

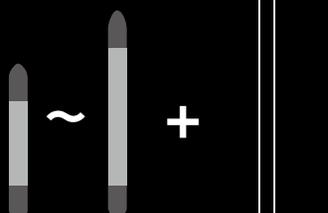
実寸大



0.25 mm厚
 板オモリ
 17 mm × 18 mm~
 17 mm × 24 mm

●バランスの底釣りオモリ量 実寸大

「絡み止めスイッチシンカー」 0.8g + 0.25 mm厚板
 オモリ 8 mm × 30 mm~「絡み止めスイッチシンカー」
 1.2g + 0.25 mm厚板オモリ 10 mm × 30 mm



強力に バラけるのに コントロール しやすい。

開きのいいバラケを思い通りにコントロールできるかどうかが
キモとなる最近のセット釣り。

テクニカルな要素が大きく私自身も難しさを感じていましたが、
「サナギパワー」の登場によって格段に対応しやすくなりましたね。

まずバラケ性が高い割にはまとまりも良く、エサ付けが簡単。

沈む際には無駄な広がりが抑えられ、
タナに入ってから細かな麩が速く、強力にバラけます。

それと同時に、集魚成分を豊富に含む
様々な大きさの粒状さなぎが続々と沈下。
狙ったスポットにへら鮒を濃く集めながらくわせエサへと導き、
ハッキリとした食いアタリをコンスタントに生み出してくれます。

現代セット釣りの理想といえるバラケエサが
ブレンドひとつで簡単にできてしまう「サナギパワー」。

今後、欠かせない一品となるのは間違いないでしょう
マルキューインストラクター「萩野 孝之」



●サナギパワー 450g(チャック袋)